ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 モコットゥナシ　絵　小笠原 小夜

テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

片山和美さん（37）＝会社員

差別のない世の中に

――お生まれは？

胆振管内むかわ町です。北海道情報大学を卒業後、スーパーマーケットに就職し鮮魚コーナーを担当しました。朝早いので大変でしたが、開店準備をし、接客でお客さまとコミュニケーションをとることが楽しかったです。その後上京し、現在は別の会社でシステムエンジニアをしています。

――どんなお仕事ですか？

企業の人、物、お金を管理するようなシステムをつくる仕事です。この会社で働くようになり、アイヌ民族であることの意識が変わりました。

――どういうきっかけで？

中学２年の時、同級生がアイヌであることを理由に陰口を言われているのを聞き、私もアイヌだと知られたら同じような目にあうと思いました。差別を初めて目にした瞬間でした。それまでは自分がアイヌだと分かっていたし、周りにも見た目でアイヌと分かる人もたくさんいたけど、特別意識せず暮らしていました。

今の職場は道内出身者ばかりで、同世代でとても仲良くなりました。そのうちに自分がアイヌであることを隠しているのが後ろめたくなり打ち明けたところ、普通に受け止めてくれたのです。北海道では周囲の差別を目にしていたけれど、そうじゃない人もいるし、そうじゃない関係もあるんだと思いました。

――読者に伝えたいことは。

私はアフリカのガーナ出身の夫と結婚し、昨年むすめが生まれました。アイヌもそうですが、民族をこえた結婚により子供の見た目が和人とちがうことで差別されない世の中になってほしい。自分の好きなことをどんどんやって、その努力が将来の財産になる。みんなは失敗をおそれず、いろんなことにチャレンジしてほしいし、私も親としてむすめにそういう環境を用意してあげたいと思っています。

◇

このコーナーではさまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

タンペ エエラムアン？

「きみ、これ知ってる？」の意味

■鳥のカムイ

北海道のアイヌ民族が昔、クマを飼っていたことを知っている人は多いでしょう。ほかにもキツネやタヌキも飼っていました。そしてフクロウ、タカ、ワシ、カケスといった鳥も。１６４３年に北海道などを航海したオランダ人ブリースは、樺太東海岸の村に立ち寄った際、家の中でワシが飼われているのを見ました。

動物を飼う理由は、主にカムイとの間に固いきずなを作るということだったそうです。鳥は獲物や雄弁（人前で話す能力）を授けてくれたりと、いろいろなご利益があると考えられてきました。また、ワシやタカの羽は、重要な交易品にもなりました。

今は鳥を飼うというインコのような小鳥が多いと思いますが、昔は動物園で見られるような猛禽類も大切に育てていたんですね。

（岩谷実咲・札幌大学ウレシパクラブ３年生）

ネウサラ おはなし

語りながら 聞きながら

幸福の小鳥

＝有珠の話

（吉田巌「アイヌ童話」より）

小鳥を飼っている子供。ある日１人でつりに出かけた

あるところで、子供が小鳥を飼っていました。子供は毎日小鳥の世話をし、大切にしていました。小鳥はえさをもらうと外に遊びに行き、夜にもどるという暮らしでした。

ある日、子供は船でつりに出ました。ところが、少し前まで晴れていたのに、急に深いきりがかかって辺りが暗くなるし、風もふいてきました。このままでは帰る方向が分からなくなるし、風で船が流されてしまいます。子供はあわてて船をこいでもどうとしました。すると、きりのおくの方から「おーい、おーい」と声がし、だんだん近づいてきました。子供は一生懸命に船をこいでいましたが、声はまだ聞こえるので、「海のお化けが人をつかまえようとしているのだろうか」と思っておそろしくなりました。

その時、船の行く手の大きくもり上がった波の向こうに、角を生やした一つ目のお化けがぬーっと出てきました。そして「いくら呼んでも返事をしないとは。待たんか」と大声をあげながらにらみました。子供はおどろいて動けなくなってしまいました。お化けはにやりと笑うと、船のかいを取り上げて、代わりにスイスイとあら波をわたり、岩でできた島に子供を連れて行きました。

その島にはお化けの家がありました。連れて行かれると、家の外や中には、あちこちからさらわれてきた人間たちが干し魚のようにつるされていました。いろりには、まだ血がしたたっている人間の肉が焼かれています。子供は自分もこうやって食べられてしまうのだとおびえていました。

見ると、いろりのそばに、一つ目お化けの子がいました。いろりでは人の肉を焼いていて、お化けの子はその焼け方を見ながら番をしていました。大きいお化けは「この子供もしっかり焼いておけ。もう一回仕事をしてくるから、にげられないようにしろよ」と言って子供をなわで柱にしばりつけると、また出かけていきました。

子供はこわくてしかたがありません。ふるえていると、まどのところに何かやって来ました。それは子供の飼っている小鳥でした。小鳥は話をするのが上手で、お化けの子に話しかけて、お化けの家の宝物を見せてくれるようにうまく言いくるめました。お化けの子は得意になって、ほこらしげにたくさんの宝物を出して、数えてみせました。その間に、子供はなわからぬけると、宝物を数えるのに夢中になっているお化けの子をしばり、宝を持って一目散にげだしました。

不思議な宝物の力でお化けからのがれた

やがて大きいお化けが帰ってきました。家に入ると、自分の子がしばられて泣いています。おまけにさらってきた人間の子供はいませんし、大切な宝物もなくなっているのに気づきました。お化けはおこって、おそろしい速さで走りだし、子供を追いかけました。

子供は小鳥の後についてにげていました。海に出て船に乗り、もうすっかりにげきったと思ったのに、だんだんお化けが追いついてきました。そのとき、小鳥が「その糸玉を投げなさい」と言いました。そこで、宝の中にあった糸玉を海に向かって投げました。これでもう大丈夫かと思いきや、お化けは平然と山を乗りこえてせまってきます。次に小鳥は「刀をなげなさい」といいました。宝の山から刀をひとふり取って投げると、今までかかっていたきりがパッと晴れて、光がさしました。すると光を浴びたお化けは消えてしまいました。あのおそろしいお化けも、日の光には勝てなかったのです。

さらわれて亡くなった人たちは気のどくでしたが、子供は小鳥を大事に育てていたおかげで、あぶないところを助けられました。そして、思いがけなく手に入れた宝物で裕福になりました。

お化けにつかまった子供。そこへ小鳥が助けに来た

魔法アイテムでピンチ脱出

このお話は、日本語のあらすじだけが残っています。分かりやすくするため文章をおぎないました。

子供は小鳥を放し飼いにしていましたが、アイヌ民族は、普通はかごを作って鳥を飼いました。小鳥も神様なので大切にします。そのかいあって、子供のピンチに助けに来てくれました。お化けの家でしばられてしまったとき、子供は小鳥が来てくれてほっとしたことでしょう。といってもピンチには変わりありませんが、その後は小鳥の思いがけない活躍で救い出されました。

子供がにげるとき、魔法のアイテムを投げて助かります。日本の「三枚のお札」の話にも似ていますね。こうしたストーリーは和人をはじめ世界のあちこちの民族にみられます。いろいろな文化がありますが、昔話の世界では似ているところもたくさんあるのです。おもしろいですね。